みんぱくリポジトリ
国立民族学博物館学術情報リポジトリ National Museum of Ethnolo

マレーシア東海岸における小規模漁民の操業と漁種選択

メタデータ	言語: ja 出版者: 公開日: 2010-07-08 キーワード (Ja): キーワード (En): 作成者: 飯田, 卓 メールアドレス: 所属:
URL	http://hdl.handle.net/10502/4108

マレーシア東海岸における小規模漁民の操業と漁種選択

Small-Scale Fishing Activities and Gear Selection in Terengganu, Eastern Peninsular Malaysia

飯　田　　卓

IIDA Taku

地域漁業研究 第44巻 第3号 別刷
2004年　6月

地域漁業研究
第44巻，第3号，2004.

マレーシア東海岸における小規模漁民の操業と漁種選択

国立民族学博物館　飯　田　　卓

1．はじめに

現在、世界各地で小規模沿岸漁業の急速な近代化が進み、さまざまな問題が生じているといわれる。たとえば、動力化によって漁船の操業範囲が拡大した結果、操業範囲の重複が多くなって軋轢が増えている。また、漁業技術の向上した現在では、漁獲圧が高まり、沿岸漁場の資源水準は一般に低下しているため、軋轢はいっそう激化する[1]。戦前の日本漁業のように沿岸から沖合へ、沖合から遠洋へと漁場拡大の余地があればよいが、沖合にはすでに自国内外の資本が大型船を操業させており、多くの漁民がとりうる選択肢はかぎられている。それにもかかわらず、ある試算によれば、世界じゅうの小規模漁業従事者数は大規模漁業従事者の100倍にものぼるという[2]。こうした現状において、小規模漁業に関する知見を深め、広域的な社会経済のなかでその役割を適切に位置づけ発展させることは、今日的な課題として残されている。

ちなみにわが国では、大正期から昭和初期にかけて沿岸漁業の動力化が進んだが、これは同時に沿岸漁業の集団化でもあったため[3]、こんにちの沿岸漁業秩序の崩壊とは異なる側面をもっている。むしろ、昭和30年代以降に起こった漁民層分解が、これに類似した現象であろう。すなわちこの時期、漁船大型化にともなう投資拡大や経営合理化を達成できなかった100トン未満の経営体が、個人経営に転換して維持費を削減し、実収入の安定をはかった[4]。その結果、小型動力漁船が増加したのである。しかしこの過程も、特殊な事情のために、それほど深刻化せずに終わった。すなわち、高度経済成長により他の産業部門で雇用が拡大したため、解雇された漁船乗組員の大部分が脱漁民化するとともに、沿岸漁業経営体数が全体的に減少したのである[5]。言いかえれば、沿岸漁業不振のために、小規模漁業問題が結果的に緩和されたといえる。

こうしたシナリオを現代の各国漁業に期待するのは無理があろう。現在では、漁業部門の労働力を吸収するほど他部門発展を見込める国や地域が少ない。場合によっては、本稿で論じるように、集団的にいとなまれていた漁業経営体が解散する結果、小規模な個人経営体がかえって増加することすらある。また、先に述べたように、沖合への進出にも限界がある。小規模沿岸漁民の多くは、いわば、海にも陸にも向かうことができず閉じ込められているのである。

本稿では、マレーシア半島部の東海岸に位置する小村を事例に取り上げ、同地における沿岸小規模漁業の実態を報告する。この地域では、漁船の大型化によって沖合漁場の開拓が進むいっぽうで、船外機つきボートを用いて沿岸で操業する個人経営の漁業者も少なくない。彼らの利用する漁場は、他の熱帯海域と同様に魚種の多様性が高いが、バイオマス全体としての資源水準は必ずしも高くない[6]。このため、1人の漁業者が釣りを中心にさまざまな漁法を併用することで、魚種の多様性に対応している。彼らによる複雑な漁種選択の過程を明らかにすることは、行政関係者や研究者が

じゅうぶん把握してこなかった同国の小規模漁民の実状[7]を理解するうえで、重要であろう。

本稿では、生態人類学的な観点からおこなった参与観察と出荷量分析の結果にもとづき、同地域における漁業者の操業実態を報告するとともに、漁業者が漁種選択をおこなう際の基本的な行動パターンを明らかにする。すなわち、多種類の漁法によって魚群を探索しながら漁獲するという「ジェネラリスト的行動」と、大漁を見込める漁法を集中的に用いて漁獲するという「スペシャリスト的行動」の使い分けである。船外機つき小型ボートの普及は、漁業の不確実性を全面的に軽減したわけではないが、漁法のレパートリーを増やし、ジェネラリスト的行動とスペシャリスト的行動の使い分けに利点をもたらしたと推測できる。本稿では最後に、こうした「漁獲行動の多様性」という観点から沿岸小規模漁業を見通す意義を提示する。

2．調査地と調査方法

1）調査地

調査をおこなったジャンブ・ボンコッ村（Kampung Jambu Bongkok）は、マレーシア北東部のトレンガヌ州（Negeri Terengganu）マラン地区（Daerah Marang）ムルチャン小地区（Mukim Mercang）に位置する行政村である（図1）。州都のクアラ・トレンガヌ（Kuala Terengganu）からは、南東方向へ約50kmの海岸に位置する。地区役場マランからの距離は約34kmとやや遠いが、約13km離れた小地区役場所在地ムルチャン、および約20km離れた隣の地区役場所在地ドゥグン（Dungun）へは交通の便もよく、ジャンブ・ボンコッ村は両者の通勤圏内になっている。

村の人口は約3,000人といわれ、2001年にはこのうち94人が漁業免許を取得していた。一部の漁業者は免許更新料を支払おうとせず、免許申請をおこなっていなかったが、こうした「違法行為」に対する取り締まりは、調査時点で次第に強化されつつあるようだった。

村民は、村をさらに5つの地区に分けて認識しているが、それらの境界は行政的に確定されておらず、いわゆる自然村に対応する。ここではこれを村区と呼ぼう。村の海岸線は約1.5kmにわたり、北から順にバル・トラガ・アイ村区（Kg. Baru Telaga Air）、タンジュン村区（Kg.

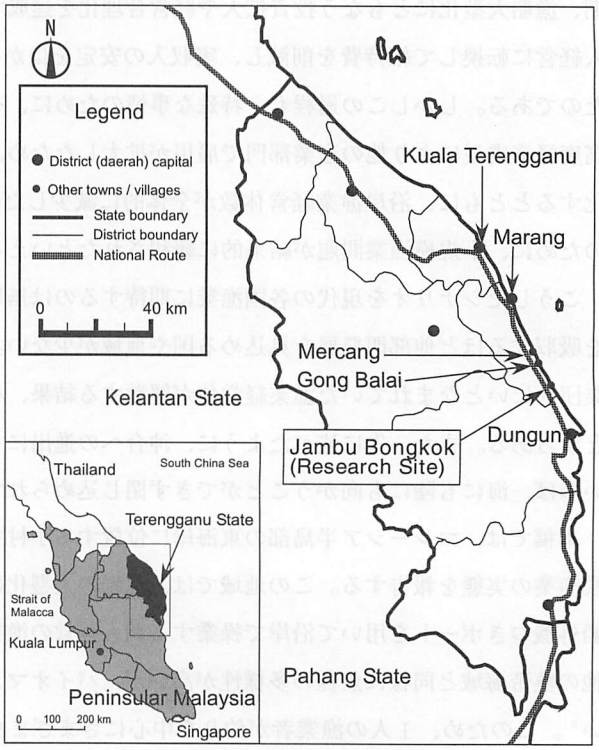


図1　調査地の位置

Tanjung)、トゥンガ村区（Kg.Tengah)、バル村区（Kg. Baru）が隣り合うほか、内陸にはランパン・ジャンブ・ラウッ村区（Kg. Lampang Jambu Laut）と呼ばれる村区がある。

海岸に位置する4つの村区では、砂浜に恵まれた海岸に漁船が散在している。砂浜のやや上方には使用されていない漁船が放置され、使用されている漁船と明確には区別できないものの、約60隻の船外機つきボートがこの村で使用されている。とくに、トゥンガ村区とバル村区には仲買人（*taukeh*）の集荷場があるため、漁船が集中して分布する。バル村区の仲買グループは調査期間を通じて1つであったが、トゥンガ村区では2001年に2つあり、2002年には3つに増えた。トゥンガ村区ではこのほか、茶屋（*kedai kopi*）も出店していて漁船がとくに多いため、本稿のもととなる観察資料はここで得た。茶屋の前には約150mにわたってボートがあがっている。2001年の調査時にはその数が34、うち船籍登録番号[8]を明記しているものが16あった。このなかには、週末にのみ出漁するスポーツ・フィッシング（*main-main*）のための船や、職業的漁師のものではあるがふだん用いられない旧式の船なども含まれる。この年の観察では、もっとも多い日には27隻のボートが出漁していた[9]。

内陸のランパン・ジャンブ・ラウッ村区は新開地で、政府による住宅地売却が進行しているほか、国営企業フェルダ（FELDA）が経営するアブラヤシ農園や、個人経営のゴム農園がある。川では、観賞魚となるアロワナ（*ikan kelisa*）などを釣る者もいる。この村区に住む者のなかにも、トゥンガ村区の砂浜から出漁する漁師がいる。

村では、基本的に核家族が家屋を共有して居住している。未婚の成人は村内に少なく、近年になって都市での労働が増加したことを示している。村民の活動は村外でも活発である。中学校（*sekolah menengah*）が村内にないため、村民は就職前からムルチャンへ通うし、ドゥグンに職場を持つ者も多い。村でのみ働く者は、しばしば、ゴム農園や果樹園を所有する。これらの自営農業と自営漁業、そしてアブラヤシ農園や役所などでの賃金労働が、この村の主たる生業である。いずれかの生業に特化して生計を営む場合もあるが、ひとつの世帯や個人が複数の生業につくことで家計を維持する場合も少なくない。

2） 調査方法と資料批判

現地調査は、2001年8月23日から9月22日まで、および2002年7月4日から8月3日までの2度にわたっておこなった。マレー語の習得も調査と同時に進め、聞き込みにはもっぱらマレー語を用いた。漁業の概況を知るうえで頻繁におこなった作業は次のようなものである。未明にトゥンガ村区の茶屋の前浜に出て行き、出漁する船と出漁時刻、帰漁時刻を記録する。また、すべての船が帰漁するまでのあいだ、帰漁した船を砂浜の上方へあげるのを手伝いつつ、漁獲された魚の名称や、必要に応じてその大きさや量などを記録した。目分量の場合も少なくなかったが、携帯用ばねばかりで計量したり、集荷場まで同行して買い上げ重量の測定に立ち会ったりすることもあった。ただし、帰漁が集中する時刻が毎日一度は必ずあるので、漁獲に関する記録は完全でない。また、

海況や漁獲量に関して漁業者の印象を尋ねることもあった。

こうした参与観察で得た資料とともに、本稿では、一部の漁業者が出荷の際に記録した出荷台帳の資料を取り上げる。この台帳は、漁業者たちが帰漁して出荷用の魚を集荷場で計量したさい、日付と出荷者および魚種ごとの重量を記録しておくものである。漁業者たちは台帳に記録するだけでなく、さらにこれをもとに出荷伝票を作成し、魚を集荷しに来たトラックの運転手に渡して魚と一緒に届けてもらう。つまり、出荷額の根拠となるため信頼性が高く、記録が通年にわたるというきわめて有用な資料なのである。

しかし以下のような短所もある。第一に、出荷量が漁獲量を正確に反映しているとはかぎらない。漁獲はすべて市場に出荷されるわけではなく、自家消費したり知人に分与したり、浜を通りかかった者に対して即売したりするからである[10]。もっとも、参与観察で明らかになったかぎりでは、市場価格の高い魚は大部分が出荷にまわされていた。

このことに関連した第二の短所として、出荷のあった日と出漁日が一致するとはかぎらない。たとえば、後述するように、大人数が協同してマナガツオを漁獲した場合には、一人の漁業者が代表して漁獲を出荷し、現金化してから他の協同者に配分する。この場合、出荷台帳に漁獲が記載されるのは代表の一人だけである。また、自分で船を出さずにガイドとして、スポーツ・フィッシングの船に同乗したり、カツオまき網船に同乗したりして分け前を得た場合も、出漁して収入があったことが出荷台帳からわからない。また、出荷できるほど漁獲があがらなかった日も、出荷台帳に記録されることはない。こうした事情は、出荷台帳に記されている出荷日と、参与観察でわかった出漁日の対応をみれば明らかであろう。表1にそれを示した。多くの漁業者が出漁しているにもかかわらず、協同で漁をおこなったために出荷しなかったり、出荷できるほどの漁獲をあげられなかったりしたことがわかる。

表1　出荷日と出漁日の比較

	2002年7月8日	12日	14日	15日	16日	17日	18日	19日	21日	23日	24日	29日	30日
漁業者A	(+)	(+)	(•)	(•)	(•)	+	(+)	+	+	+	•	+	+
B		•	•	•	(•)	+	•	+	+	•	•	+	•
C	+	+	(•)	•	(•)	+	+	+	+	+	+	+	+
D			•	(•)	(•)	(+)	(+)	(+)	(+)	+	+		(+)
E	•		•	•	(•)	+	•	+	•	•	•	•	•
F	+	•				+	•	•	+	+	+	+	+
G							(+)	(+)	(+)	+	•	•	(+)
H	+	•	•	•		+		•	•	•	•	•	•
Z	•		•	•	•	+	(+)	(+)	•	•	+	+	(+)

+：出荷あり／•：出漁したが出荷なし／空欄は出漁せず
括弧は、協同で漁をおこなったために出荷がなかったことを示す。
(+)：協同者のうち少なくとも1人が出荷／(•)：どの協同者も出荷せず
漁業者名A～Hは表3に対応。Zは2001年に出荷していなかった。

第三に、出荷を引き受ける仲買人と漁業者は必ずしも固定的な関係になく、一人の漁業者が毎回同じ相手に漁獲を売却するとはかぎらないため、一つの出荷台帳から各漁業者の出荷状況を正確に知ることができないという点がある。この点は、長期的な分析においてとくに考慮すべきであろう。

短期的には、各漁業者の出荷先が頻繁に変わることはほとんどない。漁業者の多くは仲買人から漁船購入のための融資を受けており、他の仲買人への売却を自由にできるわけではないからである[11]。融資を受けていない場合でも、同じ仲買人に出荷して支払いを受けたほうが手続きのうえで簡略だし、自分の漁獲実績も理解しやすい。このため、一度出荷先を決めれば容易には変更しないのがふつうである。わずかに一例、なじみの仲買人以外の仲買人に、捕れたイカをこっそり出荷したという例を耳にした。イカの買い値に開きがあったためである。実際にイカを出荷した者によれば、こうしたことが大っぴらになると仲買人との関係が悪くなるため、頻繁にはやらないという。このように、魚種によっては、実際の漁獲と出荷量が大きく開く危険性もある。今回の分析ではこのことによる信頼性の損失はないが、念頭に置いておくべきであろう。

第四に、人名や魚名に関して著しい表記ゆれがある。人名については単なる表記ゆれだけでなく、まったく異なった愛称を用いることも少なくないため、注意が必要である。台帳に登場する全魚名およびそれらの表記ゆれを表2に示した[12]。これら名称に関する問題は、未知の名称について聞き取りを重ねることで解決できる。

第五に、書き間違いや書き落としの可能性があげられる。これらが生じる頻度は、出荷台帳と出荷伝票を対照させることであるていど推測できよう。台帳を転記した出荷伝票のうち、2001年3月31日から9月4日までのものが欠番なく入手できたので、これを出荷台帳と比較してみた。台帳と伝票から明らかになった期間中の出荷件数は、1,401件だった。計量は必ず魚種ごとになされるので、同じ日に同じ漁業者が出荷した魚であっても、魚種が違えばそれぞれ1件に数えられる。1,401件のうち、台帳だけに記載されている件数は77件、伝票だけに記載されている件数は60件あった。前者の大部分は、出荷しようとしていったん記載したものの、通行人が買いつけたために伝票に記載しなかった事例だと思われる。後者は、台帳以外の紙に重量をひとまず控えておき、伝票に清書する段階で書き写した事例であろう。両者を合計しても全体の1割に満たないから、台帳の記録の信頼性は高いといえる。このほか、台帳への記録を忘れたために伝票にも記載されなかったという例が考えられるが、この場合は支払いがまったくおこなわれないはずなので、こうしたことが生じないよう漁業者たち自身がじゅうぶんに注意していると信じてよい。唯一、100kgを超す大型のサメやエイが漁獲された場合、集荷場の秤では計量できないので、台帳にも伝票にも記載がない。しかしこうしたケースは稀であり、筆者の滞在中には目撃できなかった。

このほかに、台帳と伝票のあいだで日付の食い違いが127件あった。このうち、伝票の日付が遅れている例は84件である。漁獲の翌日以降に集荷がなされたため、食い違いが生じた例が多いと思われる。伝票の日付が早い例は書き間違いと考えてよいが、全体のなかでの割合は少ない。また、重量の食い違いが37件あったが、これは記帳後に通行人が魚を買い上げたり、出荷用の魚を後から追加したりしたためであろう。このほか、台帳に魚名が記載されているが重量の記載がない例が1件、台帳の重量が判読できない例が1件、台帳にも伝票にも重量が記載されていない例が2件あった。また、台帳に重量が記載されているが魚名の記載がない例が3件あった。

表2　出荷台帳に登場する魚名

方名	学名	標準和名	方名別名・下位範疇	出荷台帳での表記ゆれ
ORECTOLOBIDAE（テンジクザメ科）				
yu bodoh		〔テンジクザメ科〕		
CARCHARHINIDAE（メジロザメ科）				
yu	*Carcharhinus sorrah*	ホウライザメ		
RHINOBATIDAE（サカタザメ科）				
yu perjam	*Rhynchobatus djiddensis*	トンガリサカタザメ		yu perjan, yu perjani
DASYATIDIAE（アカエイ科）				
pari	*Himantura uarnak*	ヒョウモンオトメエイ		
〃	*Himantura zugei*	〔オトメエイ属〕	tuka	
pari daun	*Gymnura poecilura*	オナガツバクロエイ		
pari helam	*Aetobatus narinari*	マダラトビエイ		pari lam
pari tembikah		〔アカエイ科〕		
CHIROCENTRIDAE（オキイワシ科）				
parang	*Chinocentrus dorab*	オキイワシ		
ARIIDAE（ハマギギ科）				
duri	*Arius thalassinus*	〔ハマギギ属〕	utek	
pulutan	*Arius maculatus*	ハマギギ		pelotan
mayor	*Osteogeneious militaris*	〔ハマギギ科〕		
PLATYCEPHALIDAE（コチ科）				
baji	*Cociella crocodila*	イネゴチ		
SERRANIDAE（ハタ科）				
kerapu baik	*Epinephelus areolatus*	オオモンハタ		
kerapu hitam	*Epinephelus* sp.	〔マハタ属〕	kerapu coklat	
kerapu bara	*Plectropomus leopardus*	スジアラ	kerapu pisang	
kerapu tanjung		〔ハタ科〕		
RACHYCENTRIDAE（スギ科）				
aruan tasik	*Rachycentron canadum*	スギ		tasik
CARANGIDAE（アジ科）				
ebek	*Alectis indicus*	ウマヅラアジ		ebet, ibek
gerong belang	*Gnathanodon specious*	コガネシマアジ		
gerong pulau	*Carangoides* sp.	〔ヨロイアジ属〕		gerong pelau, gerong pelar
muduk	*Carangoides gymnostethus*	アンダマンアジ	berkas	mudor, modok, berekas, bekas
cermin	*Carangoides bajad*	コガネアジ	terak, petek	teraki
selar	*Atule mate*	マテアジ	selar pucat	
selar pelata	*Alepes djebada*	〔マブタシマアジ属〕		
selar kuning	*Selaroides leptolepis*	ホソヒラアジ		
selar cupak	*Caranx ignobilis*	ロウニンアジ		
aji-aji	*Seriola dumerili*	カンパチ		aji, haji, haji-haji
CORYPHAENIDAE（シイラ科）				
belitong	*Coryphaena hippurus*	シイラ		
LUTJANIDAE（フエダイ科）				
merah	*Lutjanus malabaricus*	〔フエダイ属〕		
〃	*Lutjanus sabae*	センネンダイ		
remong	*Lutjanus vitta*	ヨコスジフエダイ		remon
〃	*Lutjanus fulviflamma*	ニセクロホシフエダイ	remong tenda	
〃	*Lutjanus kasmira*	ヨスジフエダイ	remong kuning	
delah	*Caesio cuning*	〔タカサゴ属〕	locong	
daling		〔タカサゴ亜科〕		dalling, dalin
GERREIDAE（クロサギ科）				
kapas	*Gerres* sp.	〔クロサギ属〕		
HAEMULIDAE（イサキ科）				
kaci	*Diagramma pictus*	コロダイ	tok bomoh	
gerut	*Pomadasys argenteus*	〔ミゾイサキ属〕		great, gerui
NEMIPTERIDAE（イトヨリダイ科）				
kerisi	*Nemipterus marginatus*	トンキンイトヨリ		
〃	*Nemipterus furcosus*	〔イトヨリダイ属〕		
pasir	*Scolopsis affinis*	〔タマガシラ属〕		
LETHRINIDAE（フエフキダイ科）				
asoh	*Lethrinus lentjan*	シモフリフエフキ	tombok sirih	asah
jenohor	*Lutjanus argentimaculatus*	〔フエフキダイ属〕		
tombok sirih	*Lethrinus erythropterus*	〔フエフキダイ属〕		
bopin	*Lethrinus olivaceus*	〔フエフキダイ属〕		
SCHIAENIDAE（ニベ科）				
gelama		〔ニベ科〕		
MULLIDAE（ヒメジ科）				
butir nangka		〔ヒメジ科〕		butir naka
EPHIPPIDIDAE（スダレダイ科）				
gadan	*Palatax* sp.	〔ツバメウオ属〕		
daun baru	*Drepane* sp.	〔スダレダイ属〕		
SCARIDAE（ブダイ科）				
bayam		〔ブダイ科〕		bayan, bayang
SIGANIDAE（アイゴ科）				
dikis lebang	*Siganus javus*	〔アイゴ属〕	dikis koman	dikis, gebang
SPHYRAENIDAE（カマス科）				
kacang	*Sphyraena putnamiae*	オオカマス	tenak	tenah
〃	*Sphyraena obtusata*	ダルマカマス		
TRICHIURIDAE（タチウオ科）				
layor	*Trichiurus* sp.	〔タチウオ属〕		
SCOMBRIDAE（サバ科）				
aya	*Euthynnus affinis*	スマ		
kembung	*Rastrelliger kanagurta*	グルクマ		kembong, kebong
tenggiri	*Scomberomorus commerson*	ヨコシマサワラ		
PSETTODIDAE（ボウズガレイ科）				
togok	*Psettodes erumei*	ボウズガレイ		
BALISTIDAE（モンガラカワハギ科）				
jebong batu		〔モンガラカワハギ科〕		
MONACANTHIDAE（カワハギ科）				
barat	*Aluterus monoceros*	ウスバハギ		barak, bart
科レベルで同定できなかった魚類				
dukang		〔ナマズ目〕		bukang
layoran		〔メカジキ亜目〕		
MOLLUSCA（軟体動物門）				
sotong ngabang	*Sepioteuthis lessoniana*	アオリイカ	sotong mengaban	sotong maban
sotong kulit	*Sepia* sp.	〔コウイカ属〕	sotong bunga	sotong kulik
sotong panjan		〔アカイカ科〕		
ARTHROPODA（節足動物門）				
udang putih		〔エビ亜綱〕		
udang ketak	*Panulirus* sp.	〔イセエビ属〕	udang kerek	udang ketok

以上を要約すれば、出荷台帳の記録は出荷件数の9割以上をカバーしており、長期的な漁獲傾向を知る資料としては有用といえる。ただし、出荷されない漁獲や別ルートで出荷される漁獲は出荷台帳にあらわれないので、これらの傾向を知るには別の調査が必要である[13]。以下では、漁獲の傾向を知る手がかりとして、2001年分の出荷台帳を分析した。その件数は1,819件であったが、台帳にも伝票にも重量が記載されていない2例を除き、台帳に記載されておらず出荷伝票に記載されていた71件[14]を加えた。この結果、1,888件の出荷が分析の対象となった。出荷重量の合計は14,738kgであった。また、各魚種の平均価格を仲買人から聞き込んで出荷金額を推定すると[15]、58,934リンギッ（以下、RMと略記。調査当時、RM 1は約32円）であった。

3） 過去20年間における漁業

ジャンブ・ボンコッ村の漁業者たちは、村の漁業がかつて繁栄していたことを、機会あるごとに口にする。1970年代から80年代にかけては多くの船主がおり、船を持たない者も乗り子として引く手あまただった。もっとも栄えたのは、大型のまき網（*pukat cerut*）によるカツオ漁である[16]。現在、ジャンブ・ボンコッ村では10～15人乗りの船が1隻だけ操業しているが、最盛期には4隻が着業していた。どの村にも鰹節の燻製工場があり、買いつけには日本人がやって来ていた。

また、やや小型の船内機動力船による魚かご漁（*bubu ikan*）も盛んだった。この漁船は船長10m余の木造船で、乗組員は2～3名である。最盛期には、これと同じ規模の船が40隻もあり、1人の船主が3隻もの船を経営することもあった。現在は、村に3隻の魚かご漁船があり、それぞれが40～50個の魚かごを近海に設置しているにすぎない。

これらカツオ漁船および魚かご漁船の数が減少した最大の理由は、小型で扱いやすい船外機動力漁船が普及したことである。大きな船は舷高が高くて小回りがきかないし、砂浜に上げられないので、沖に停泊させてはしけで陸と行き来しなければならない。また、季節風が卓越し波が高くなる12～2月には、ドゥグンの漁港で保管しておかなくてはならない。これらの点では船外機つきボートは便利だし、ひとりでも出漁できる手軽さがある。

現在用いられている漁船の多くは、FRP（繊維強化プラスチック）製で全長約3.5～5 mであり、1人または2人で乗って操業するのがふつうである。現在よく売れている5 mのボートの価格は、RM1,850である。ボートに備え付けるガソリン式船外機は2～15馬力で、現在の主流は5馬力と15馬力、価格は15馬力のものがRM3,800程度である。1986年にジャンブ・ボンコッ村に移住してきた者の話によると、当時は木製の船しかなく、船外機は2馬力のものが若干あった程度だった。

大中型漁船減少の第二の理由は、若年層労働力の村外への流出である。ある漁業者は、「乗り子（*kawan*）を集めるのが難しくなったから、一人でも行ける船外機ボートに乗り換えたのだ」と語る。中学校を卒業したジャンブ・ボンコッの若者たちはとりあえず都市部で就職を探す傾向にあるため、若い乗組員の確保が難しくなっているのである。その証拠に、労働力を確保しやすい地区役

場所在地ドゥグンでは、大型漁船数が増加しているという[17]。また、全国的な統計[18]を見ても、登録されたまき網漁船や魚かご漁船における労働者数は減っておらず、これらの漁業自体が衰退しているとはいえない。

最後に、大中型漁船減少の第三の理由は、漁場環境の悪化である。元船主や現役漁業者たちのほとんど全員が、口をそろえて「昔ほど魚がいなくなったから」大中型船は廃業したのだという。このことを統計から確認することは難しい。たとえばトレンガヌ州の漁獲統計では、水揚げ高がむしろ漸増している[19]。この増加は経営体あたりの漁獲増によるのでなく、着業数の増加によるものかもしれないが、小型漁船の登録が徹底され始めたのは近年であるため、経営体あたりの漁獲が減っているという確証はない。しかし、この十数年における漁獲の減少は、多くの漁業関係者が共通して認めるところである。たとえば、10年前に仲買人を始めた者の話によれば、当時と現在では漁業者の数がそれほど変わっていないにもかかわらず、当時は1トン入りのクーラーボックスを10箱も出荷する日が珍しくなかったのに対し、現在では3箱を超えて出荷することはほとんどない。また、1人の漁業者が1日で100kgものハタ類（*kerapu*）を出荷することがあったというが、2001年の出荷台帳を調べたところ、21.4kgの出荷が最高であった。また、漁場環境の悪化は、カタクチイワシ（*ikan bilis*）など、いくつかの魚種に関してとくに顕著であった。現在、カタクチイワシは小型のまき網で捕獲するが、かつては魚群が岸近くまで来遊することが多かったため、地引網で捕獲することがふつうだった。また、この魚を煮干に加工するため、村内には7軒もの工場が稼動していたという。現在残っているのは1軒だけだが、そこで作業がおこなわれるのもカタクチイワシの水揚げがあったときのみで、年に数回ほどしかない。こうした資源状況の悪化は、大型および中型規模の漁業において同様に生じたと考えても不自然ではない。むしろ、流通の改善による需要の増大と漁業技術の向上により、資源水準が低下したと考えるのが妥当であろう。

これら複数の理由により、まき網漁船や魚かご漁船で働いていた多くの労働者が、船外機ボートを購入して個人漁業を営むようになった。トゥンガ村区の茶屋の前から頻繁に出漁していた船外機ボート所有者約30名のうち、少なくとも9名は独立する前にまき網漁船で働いていた。また、他の5名は魚かご網漁船を自営するかそこに雇用されるかしており、別の3名は他の町の漁港を拠点とする底びき網（*pukat tunda*）漁船に雇用されていた。過去20年間のあいだに、漁業経営の個人化が進んだといってよいであろう。

3．小規模漁業の概略

1） 出荷の頻度と季節性

表3に、2001年の出荷台帳に登場する人物を整理し、その出荷日数と出荷件数を示した。23人が出荷しているが、比較的多く出荷するのは上位の10人で、他の13人は出荷日数が30日に満たない。他の13人のなかには、漁業以外の定職を持っていて片手間に漁業をやる者が多かったが、他の出荷ルートをも利用するため台帳への記載が少ないという例もあった。後者の場合、出荷台帳の記録で

表3　出荷台帳に登場する人物

	出荷日数	出荷件数*	兼業（括弧内はとくに冬の職業）	年齢**	備考
A	105	310	（大型漁船乗り組み）	51	
B	103	246	とくになし	44	
C	86	199	（川漁）	52	
D	76	163	（大型漁船乗り組み）	49	
E	64	106	（川漁）	58	
F	63	176	とくになし	66	
G	61	108	とくになし	51	
H	57	259	とくになし	64	
I	44	94	（大型漁船乗り組み）	30	
J	34	91	電力会社勤務	n.d.	
K	13	25	不明	n.d.	
L	9	21	不明	39	
M	8	25	教師	n.d.	他村在住
N	7	9	大工	n.d.	
O	6	7	公務員	n.d.	他村在住
P	5	14	農場経営	43	
Q	5	7	不明	n.d.	
R	4	4	茶屋経営、大工見習	35	
S	3	10	教師	n.d.	
T	1	7	ヤシ農園勤務	n.d.	他村在住
U	1	4	不明	n.d.	
V	1	2	不明	n.d.	
W	1	1	不明	n.d.	他村在住

* 同じ日に同じ漁業者が出荷した魚であっても、魚種が違えばそれぞれ1件に数えられる。
** 年齢は2002年現在。

は魚種などが著しく偏る可能性がある。このため、以下の漁獲分析では、大部分の出荷を台帳に記録していると思われる上位10人（A～J）を対象とした。Jを除く9人は、4月から10月頃にかけて、漁業以外の仕事をおこなうことはほとんどないという。

出荷件数は出荷日数にほぼ相関しているが、漁業者FとHの2人では1日あたりの出荷件数が多いのがわかる。この2人は、魚かご漁を好んでおこなうという共通点があった。とくにHは、トゥンガ村区で唯一の中型木造動力船を所有しており、多くの魚かごを沖合に設置していたため、魚かごによる漁獲の割合がほとんどだったはずである。このため、釣り漁などに比べて多種の水族を漁獲することになり、1日あたりの出荷件数が4.5件と抜きん出る結果になったのである[20]。いっぽうFは、船外機ボートで魚かご漁をおこなっている。船外機ボートが魚かご漁に用いられることは、これまでほとんどなかった。漁場が遠いために小型の船外機ボートでは時間がかかるし、金属製で重いかごを深い場所から引き揚げてきて作業をおこなうには広い甲板を必要とするためである。しかし近年、船外機が高速化し、FRPボートも大型のものが入手できるようになったため、こうした制約は問題ではなくなってきている。

出荷の頻度にはどのような季節性がみられるだろうか。1件でも出荷のあった日を月ごとに集計して示したのが図2である。出荷が3月から10月に集中しているのがわかる。これは、これ以外の季節には北東すなわち海側からの季節風が卓越し、波が高く小型船による操業が不可能になるためである。調査地における漁業は、季節風という気象条件に強く制約されているのである。

北東季節風の影響が強い1月と2月にも出荷があるのは、エビの一種（*udang putih*）の大群が岸

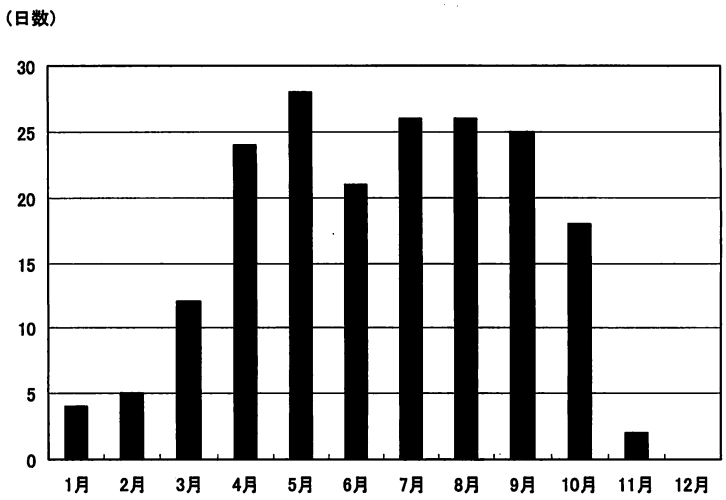


図2　出荷頻度の季節性

近くまで訪れることがあり、このような日には漁船を用いることなく刺網でエビを漁獲できるためである。この種類のエビは、1月と2月以外にはまったく出荷されていなかった。一年間の漁獲にこのエビが占める割合は重量にして1.5パーセントにすぎないが、キロあたり単価がRM35と高いため、出荷金額は全体の13パーセントを占める。たとえ出漁日数が少なくとも、この時期の漁獲が家計にとって重要なことが理解できよう。

11月から3上旬にかけて、多くの漁業者は、漁具の手入れをしながらエビの回遊を待つ。しかしそればかりではない。表3をみると、大型漁船に乗り込んで賃金雇用されたり、波の影響のない川で漁をおこなったり[21]していることがわかる。大型漁船は、トレンガヌ州のドゥグンやパハン州のクランタンを拠点とするもので、数日かけて沖合の漁場へ行き操業する。ジャンブ・ボンコッ村の海では小型漁船の使用期間が限られているが、川や他の町へ行けば漁業だけで生計を立てることも不可能ではないのである。漁獲分析の対象となった10人は、ほとんどがこうした専業漁業者である。また、それ以外で出荷台帳に記載されている者は、多くの場合、他の職種を兼ねていることが表3からわかる。

2）　漁法

ジャンブ・ボンコッでおこなわれる漁法は、かご漁・釣漁・網漁の3つに大別できる。

かご漁で用いるかご（*bubu*）には、魚かご（*bubu ikan*）とイカかご（*bubu sotong*）の2種類がある。**魚かご**は側面に入り口があり、大きさは1ｍほどで、現在は金網でつくられたものが用いられている。出荷分析の対象となった10人のなかでは、A、F、Hの3名だけが魚かご漁をおこなっていた。この漁は多様な底生魚を対象としているが、このことは表3において出荷日数と出荷件数を比較すればよくわかる。出荷日数が多ければ出荷件数がそれに応じて多くなるものだが、表3においては、漁業者ＦとＨの出荷件数が出荷日数に比べて著しく多い。これは、両者が魚かご漁をおこ

なっており、釣り漁を主におこなう他の者が捕獲しないような魚種を多数捕獲していたためである。魚かご漁に特徴的な漁獲対象として、ブダイ類（*bayam*）、タカサゴ類（*delah*）、アイゴ類（*dikis*）、タマガシラ類（*pasir*）、スジアラ（*kerapu barat*）、キンセンフエダイ（*pinang*）、フエダイ類（*remong*）などがある。魚調査期間中の聞き込みおよび出荷台帳に記載された魚種から判断すると、Fはほぼ毎日かご漁をおこなっていたが、Aは2週間に1度ほどかごを見回るだけで、他の日には釣りなど他の漁をおこなっていた。

魚かごに対して**イカかご**は、上面に入り口がある。ジャンブ・ボンコッでは、籐製のものが用いられていた。長さ1mほどの直方体をしている。漁場は魚かごよりはるかに岸に近く、村からもはっきり見える距離の場所であり、水深は浅い。漁獲対象は、アオリイカ（*sotong ngabang*）およびコウイカの一種（*sotong kulit*）である。アカイカの仲間（*sotong panjang*）がかごで捕獲されることはほとんどなく、釣りによって捕獲される。イカかごは金属製の魚かごより軽くて扱いやすい反面、耐久性が劣るため、頻繁に海からあげて修理しなくてはならない。このため設置しておく期間が短いので、誰がイカかご漁をおこなっていたかを明確に知ることはできなかった。しかし、漁業者Cは年間400kg以上、Iは年間500kg以上のイカ（アカイカを除く）を出荷していたことから、比較的長期間にわたってイカかご漁をおこなっていたと推測できる。

イカかご漁の漁場は近いため、高速の船外機は不要である。また、漁具も扱いやすいため、小型の船でも用が足りる。ジャンブ・ボンコッ村でもっとも小さいクラスの船がおこなっていたのは、こうしたイカかご漁である。出荷分析の対象となった10人には含まれていないが、2馬力の小型船外機を用いてもっぱらイカかご漁のみをおこなう者がトゥンガ村区には2名いた[22]。

釣り漁はジャンブ・ボンコッ村における主要な漁法である。漁場や漁獲対象によりさまざまな仕掛けを用いるが、延縄漁（*rawai*）を除けばいずれも一括した呼称（*pancing*）で呼ばれる。また、いずれも竿を用いない手釣りである。

釣り漁がもっとも頻繁におこなわれるのは、簡易な浮漁礁（*unjang*）においてである。この浮漁礁は、ロープの一端に砂嚢を結んで10枚のヤシの葉を1尋（約2m）間隔で取り付け、もう一端に浮子（*pelampung*）を結び付けたものである。ヤシの葉は数ヶ月で朽ちてしまうが、漁師たちは、自分が入れた漁礁の位置に何度も同じ浮漁礁を設置する。まったく新しい場所に入れるよりも魚が集まりやすいためである。こうして、頻繁に釣りに行く者たちは、自分のポイントを複数確保しているのがふつうである。漁獲対象はメアジ（*lolong*）、ホソヒラアジ（*selar*）、グルクマ（*kembung*）、イトヨリの仲間（*kerisi*）などが多い。

また、**曳き縄漁**もよくおこなわれる釣り漁である。細いナイロン糸を束ねた毛針を用いるカツオ（*aya*）漁、大きな釣り針で仕掛けをつくり小魚を餌とするサワラ（*tenggiri*）漁がその代表である。サワラの餌（*umpang*）には、オキイワシ（*parang*）やカマス類（*kacang*）、小魚ではグルクマ（*kembung*）が適するといわれる。カツオ漁とサワラ漁では仕掛けが違うほか、漁場や船を走らせる速度も異なる。

このほかに、もっぱら夜におこなう**イカ釣り漁**がある。漁獲対象は、かご漁で捕れるイカではなくアカイカの仲間（*sotong panjang*）である。船尾に木製のスタンドを立てて電球や蛍光灯を2個取り付け、発電機で照明して釣りをする。発電機の価格はRM400～1000というから、船外機やボートに匹敵するほどの投資といってよい。漁業者A、C、D、F、G、Jらは年間150～700kgものアカイカを出荷しており、発電機を用いて漁をおこなっていたと推測できる。

網漁のうち一般的なのは刺網漁（*pukat dalam*、*pukat jaring*）である。**エビ刺網漁**（*pukat udang*）は、すでに述べたとおり、波の高い季節に漁船を用いずおこなえる数少ない漁法である。網は撚糸（*benang*）製の3枚網（*tiga lapis*）で、細かい網の目合いは2.5インチである。汀線に垂直になるよう網を入れ、1時間ほどの周期で出し入れする。また、グルクマなどの魚群を捕獲する**追い込み刺網漁**の際には、目合い2インチのモノフィラメント（*tasih*）製1枚網が用いられる。このほか、もっとも一般的な刺網漁として、**エイ刺網漁**（*pukat pari*）がある。目合い10－18インチの撚糸製1枚網を海底に放置し、毎日1回漁獲を見回るという漁である。獲物がかかる頻度は低いが、数十kgのエイ類（*pari*）や、時には100kgを超すサカタザメ（*yu perjam*）がかかることがある。漁業者Bなどは2001年の1年間に1,140kgものエイを水揚げしており、その大部分はエイ刺網漁によるものだったと推測できる。彼がエイ類をもっとも多く捕った日には、193kgもの出荷があった。

まれではあるが、**船曳き網**（*pukat tanggot*）もおこなわれている。マナガツオ網（*pukat bawal*）という別名が示すとおり、もっぱらマナガツオ*Pampus* sp.（*bawal*）を漁獲対象とする。袋網（*keroncong*）が袖網に付いた構造になっており、この網を2隻の船が牽引するいっぽうで、他の船が1隻、ヤシの葉を束ねたもの（浮漁礁と同じく*unjang*と呼ばれる）で威嚇しながら魚群を網へ追い込んでいく。2001年にはマナガツオの出荷が皆無であったが、2002年の調査時には3日間で91.5kgの水揚げが見られた。この漁は、複数の船が協同しておこなう唯一の漁法である。

最後に、**すくい網漁**（*saup*）がある。7月頃に大きくなるウスバハギ（*barat baik*）の魚群を狙ったものである。この魚が他の漁法で捕れることはほとんどない。直径120cmほどの円形金属枠に高さ3mほどの袋形の網を取り付け、枠にクラゲ（*ubor-ubor*）などを餌として吊るす。5分ほど沈めておくとウスバハギが集まり、一気に引き上げると十尾前後が捕獲できるのである。出荷分析の対象となった10人のなかでは、漁業者B、C、D、E、Gが500kg以上ものウスバハギを出荷しており、なかでもBとGは1,000kg以上を出荷している。もっとも収穫の多かったBは、1日で217.5kgもの出荷をおこなったほど、大漁の著しい漁である。

3）　日周活動サイクルと漁獲売却

日の出を待たずに出漁することもまれにあるが、多くの場合、出漁時刻は日の出前後、すなわち午前6時30分頃から7時30分頃に集中する。これは潮位や天候にほとんど影響されない。これに対して帰漁時刻は、午前9時から午後4時頃までと大きな幅がある。漁師によれば、風が強かったり波が高かったりすると早く漁を切りあげ、そうでない時には帰漁時刻が遅くなるという。このほ

か、イスラム教徒の休日である金曜日には職業的漁師が海に出ることは少なく、せいぜい刺網を確認する程度である。また、金曜日にはトラックによる集荷もおこなわれないのがふつうである。

帰漁すると、カヌーを浜に上げるのを手伝った者たちに対し、無償の漁獲分与がおこなわれる。分与されるのは、マテアジ *Atule mate* (*selar puchat*)、サッパ属の一種 *Sardinella gibbosa* (*tambang*)、タテフエダイ *Lutjanus lutjanus* (*pinang*)、ムロアジ属の一種 *Decapterus* sp. (*selayang*)、グルクマなどのうち、体長 15cm 程度で市場価値のない小魚であることが多い。大人がいなければ砂浜の上に投げ捨て、それを子どもたちが拾うということがある。このほか、小魚でなくとも同じ種類の魚が大量にとれた時（カツオやウスバハギなど)、漁師が振る舞うのはもちろん、とくに断らないで魚を持っていく貰い手もいる。また、市場価値の高い魚を現金で買う者もいる。たいていは漁師の言い値で交渉が成立する。

出荷する魚は、魚種ごとに集荷場のばねばかりで計量し、日付、漁業者名、魚種、重量をそれぞれの漁師が出荷台帳に記録する。計量した魚は、氷の入ったクーラーボックスに入れておく。必ずしも魚種ごとに分類する必要はない。このクーラーボックスは、仲買人と契約した集荷トラックが午後に回収し、別の氷入りクーラーボックスがこれと引き換えに供給される。魚の入ったクーラーボックスは、ドゥグンの市場に運ばれる。支払いはほぼ 5 日に一度であるという。支払いの際には、上記の台帳をもとに漁師自身が個人ごとの伝票をつくって、支払人に渡す。

以上の記述は、仲買人がドゥグンに在住する場合であるが、ジャンブ・ボンコッ在住の仲買人もトゥンガ村区には存在する。この場合、漁師は仲買人に魚を渡すだけで、計量と記帳の一切を仲買人に任せる。この仲買人は、船外機エンジンの燃料を有償で支給するサービスや、船や漁具の融資もおこなっているので、週 1 回の支払いからは燃料代や返済額が差し引かれる (*potong*)。燃料代は、出漁回数や航行距離にかかわらず、5 馬力の船外機エンジン使用者であれば毎週 RM56（うち、エンジンオイル代 RM 6)、15 馬力であれば毎週 RM108（うち、エンジンオイル代 RM18）と定められている[23]。船や漁具の返済額は、漁家経営の状況や融資額によって異なり、漁獲が少ない週には支払額から差し引かれることはない。こうした返済が残っているあいだは、漁師が他の仲買人に魚を売却することはできないという。

協同で漁をおこなった場合は、1 人が代表となって出荷をおこない、仲買人から金を受け取ったのちに分配をおこなう。まず、燃料代を船の所有者に渡す。2002 年 7 月におこなわれたマナガツオ漁の場合、5 馬力のボートが 1 隻と 15 馬力のボートが 2 隻出漁していたが、1 日あたりの燃料代は等しく RM10 であった。次に、漁に参加した人数とボートの隻数、網の統数を合計し、この数で残った金額を等分する (*bagi*)。漁に参加した者は各 1 単位の配分を受け、ボートや網の提供者も、ボート 1 隻または網 1 統につき 1 単位を受け取る。

4．小規模漁業者の漁種選択

1） 魚の探索と、不意な漁獲機会への対応

小規模漁業者の漁種選択が複雑な過程をともなうことは、船に同乗してみればわかる。漁を始めてしばらく経っても漁獲が得られないとき、漁師は別の漁法を次々と試すからである。たとえば2002年7月31日、筆者が漁業者Bに同行して漁を観察したときを例にあげよう。午前6時41分に出港するとすぐ、B氏はカツオ曳き縄の仕掛けを船尾から垂らし、中速で航行しながら沖へ向かった。しかし一匹も食いつかなかったので、7時01分に仕掛けを上げ、ヤシの葉製浮漁礁に係留して釣りを始めた。7時26分にサワラの好むグルクマが釣れたので、これを餌に、サワラ用の大型の仕掛けも垂らした。7時35分、釣れたアジ類が20匹（重量0.6kg）になると、別の浮漁礁へ移動した。この浮漁礁は、ドゥグンで教師をしながら休日に時々出漁する者が所有している。7時40分にここで小魚を釣り始め、7時50分までに34匹のアジ類を釣り上げた。ここで再びサワラ用の仕掛けを垂らし始め、8時09分まで釣りをしたが、この仕掛けには何もかからなかった。小魚用の仕掛けにはさらに30匹のアジ類がかかった。その後に移動して、8時26分から59分まで、前日に仕掛けておいたエイ刺網を引き揚げたが、何もかかっていなかった。この網は再び入れることをせず、村に持ち帰った。村に帰り着いたのは9時08分であった。結局、2ヶ所の浮漁礁で釣り上げた、アジ類を中心とする84匹の小魚が、漁獲のすべてであった。このうち数匹はサワラ釣りのための餌になり、残る2.7kgの小魚が村に持ち帰られた。漁獲は市場へ出荷せず、すべて家に持ち帰った。

こうしてみると、漁がおこなわれたのは2時間あまりにすぎなかったが、試された漁法はカツオ曳き縄、小アジ釣り、サワラ釣り、エイ刺網と4種類にのぼる。漁場も、曳き縄を別にすれば3ヶ所を移動していた。こうした探索行動を、漁師たちは魚探し（*cari ikan*）と呼んでいる。探索行動が頻繁にみられる理由は、漁獲の不確実性を軽減するために、さまざまな条件を試しながら漁獲機会に遭遇するチャンスを増やすことが重要だからではないだろうか。もちろん、狙った獲物に遭遇するまで一つの漁場と一つの漁法に固執する忍耐強さも必要であり、ジャンブ・ボンコッの漁師もそうした行動を示すことがあるが、それだけでは大漁を頻繁に望むことはできない。さまざまな漁法や漁場に習熟して漁具も準備しておき、探索の結果に応じて適宜漁法や漁場を切り替える態度が必要なのである。

このようにさまざまな漁業条件を想定して準備をしておくことは、1回の漁に関してだけでなく、漁期全体という長期的な展望においても重要な意味をもつ。エイ刺網漁の例をあげよう。エイ刺網のような置き刺網では、漁師自身が村に戻っているあいだに獲物がかかる可能性がある。このため、漁獲機会に遭遇するチャンスを増やすという意味では、陸に上げずつねに海中に放置しておくのがよい。しかし実際には、海中に漬けているあいだに漁網が傷んだり流失したりする危険があるし、傷んだ網の補修には少なからぬ時間がかかるので、漁獲の兆候がまったくなければ網を仕掛けることはない。筆者が村に滞在していた2002年7月4日、波のやや高い日が続いていたため、網を仕掛けていた者は少なかった。しかしその日の夕方、バル村区から船を出していた漁師が大量のエイを

捕獲したという噂が広がった。漁獲量には諸説があり、300kgとも400kgとも言われていた。この噂が広まるやいなや、調査対象者のうちB、C、D、E、Hが一斉に、新たな刺網を準備し始めた。なかでもHは、前日から網を刺していたにもかかわらず、網の数を増やすことで大漁のチャンスに対応した。10人のうち、Jはこの年の筆者滞在中に漁をおこなっていなかったし、Gはエイ刺網を所有していなかったから、8人のうち少なくとも5人が大漁の噂に反応したのである。もちろん調査対象者ばかりではなく、トゥンガ村区の多数の漁師が刺網を準備し始めたので、ふだん夕方に人気のない砂浜は、急に賑わったかのような印象を与えた。

大漁の噂を聞いて刺網の準備を始めた漁師たちは、噂に踊らされて気まぐれに行動を起こしたようにも見えるが、そうとばかりも言えない。すでに述べたように、刺網は海中に漬けているあいだにも傷んだり破られたりするので、海から上げた後は時間をかけて修繕する必要がある。修繕ができていなければ、いくら気まぐれな漁師でも網を入れることはないであろう。大漁の噂が流れた時に対応した漁師たちは、まさに、不意な漁獲機会に遭遇した際の準備を怠っていなかったのである。

2） 出荷台帳にみる漁獲機会の不確実性

不意な漁獲機会にそなえて準備しておく態度が小規模漁業において重要なことは、参与観察からだけでなく、出荷台帳の分析からも明らかにできる。

たとえば表4は、各漁業者によるカツオの出荷量を示している。2002年に出荷があったのは8月25日から9月6日までの短期間にかぎられており、日数にして10日である。漁師とカツオの遭遇がいかに稀であるかがわかるだろう。しかし、カツオが漁獲対象魚種としてマイナーなわけではない。8月30日以降のように、漁業者Dだけがカツオを漁獲するならそう言ってよいかもしれないが、それ以前には分析対象者の大部分がカツオを20kg以上も漁獲している。カツオ漁獲量がもっとも多かった8月27日には、全出荷量131.8kgのうちカツオが119kg、すなわち9割以上にものぼっている。また、短期間の漁獲にもかかわらず、通年の漁獲量に対するカツオの割合は重量にして2%、金額にして推定1%にのぼる。漁業者IとJがカツオをまったく出荷しなかったことを考慮しても、カツオは重要魚種のひとつと見なさなければならない。

表4　各漁業者のカツオ出荷量（2001年、単位：kg）

	8/25	8/26	8/27	8/28	8/29	8/30	9/1	9/4	9/5	9/6	合計
A	-	-	17.5	2.5	-	-	-	-	-	-	20.0
B	-	4.3	-	17.0	6.0	-	-	-	-	-	27.3
C	4.0	-	14.4	4.0	-	-	-	-	-	-	22.4
D	11.0	-	29.0	8.7	-	6.3	2.4	3.3	4.0	12.8	77.5
E	-	5.0	3.0	4.5	-	-	-	-	-	-	12.5
F	-	-	12.0	6.5	8.4	-	-	-	-	-	26.9
G	-	11.4	21.8	21.0	-	-	-	-	-	-	54.2
H	-	18.0	21.5	7.8	6.0	-	-	-	-	-	53.3
合計	15.0	38.7	119.2	72.0	20.4	6.3	2.4	3.3	4.0	12.8	294.1

アルファベットは漁業者名で、表3に対応。IとJの出荷はなかった。

漁獲が短期間に集中するにもかかわらず大漁を見込むことのできるカツオには、それゆえ、漁師たちも常日頃から注意を払っている。筆者は、カツオが大漁だった8月27日、調査対象外の漁師の船に同乗していたが、この漁師は海鳥の群を海上に発見するとただちに周囲で曳き縄を開始した。日本と同様に、カツオの群には鳥が群がることが知られているからである。魚群の兆候を知ってすぐに漁を試みるのでなければ、次はいつ大漁を期待できるかわからない。カツオ漁においては、魚群の回遊してきたタイミングにうまく対処できるかどうかが漁の成否を決めるといってよい。

カツオと同様、漁獲が限定されるにもかかわらず漁獲高の多い魚種として、ウスバハギがあげられる。表5にその出荷量を示した。漁獲が限定されるといっても、出荷日数は28日にもわたるので、ここでは1週間を期間の単位として示した[24]。第17週には2件の出荷しかなく、第19週、第23週、第26週、第34週、第35週、第44週も各1件の出荷しかなかったので、ここでは無視することにする。すると、第31週から第33週まで（実際には7月30日から8月14日までの半月間）漁獲が続いた後に漁獲のない時期があり、第36週（実際には9月1日から6日まで）に漁獲があって再び漁獲が途絶え、第38週と第39週（実際には9月18日から23日まで）に最後の漁獲があったことになる。この3つの漁獲期は、日数にすれば短期とはいえないものの、比較的長い不漁期により区分されるので、漁獲はかぎられた日に集中するといってよい。

さらに細かく見てみよう。表6は、ウスバハギの出荷量がもっとも多かった第31週と第32週の出荷日を示したものである。漁業者F以外の漁師は、この期間中のいずれかの日に、年間でもっと

表5　各漁業者のウスバハギ出荷量（1）（2001年、単位：kg）

	17週	19週	23週	26週	31週	32週	33週	34週	35週	36週	38週	39週	44週	合計
	4/20-26	5/4-10	6/1-7	6/22-28	7/27-8/2	8/3-9	8/10-16	8/17-23	8/24-30	8/31-9/6	9/14-20	9/21-27	10/26-11/1	
A	0.4	0.6	-	1.2	56.0	94.2	-	-	-	60.0	62.0	74.0	-	348.4
B	7.0	-	-	-	448.5	311.0	38.0	-	0.5	154.0	352.0	29.0	17.5	1357.5
C	-	-	-	-	234.0	211.0	-	-	-	143.0	86.0	107.0	-	781.0
D	-	-	-	-	229.0	367.0	60.0	-	-	120.5	75.0	62.0	-	913.5
E	-	-	-	-	269.0	170.0	57.0	-	-	287.0	53.0	43.0	-	879.0
F	-	-	-	-	16.0	87.0	-	15.5	-	52.0	-	-	-	170.5
G	-	-	-	-	379.0	276.0	-	-	-	225.7	79.0	115.0	-	1074.7
H	-	-	0.5	-	150.0	47.0	-	-	-	191.9	-	-	-	389.4
J	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	48.0	-	48.0
合計	7.4	0.6	0.5	1.2	1781.5	1563.2	155.0	15.5	0.5	1234.1	707.0	478.0	17.5	5962.0

アルファベットは漁業者名で、表3に対応。Iの出荷はなかった。

表6　各漁業者のウスバハギ出荷量（2）（2001年、単位：kg）

	7/30	8/1	8/2	8/4	8/5	8/9	合計
A	-	-	56.0	-	94.2	-	150.2
B	110.0	121.0	217.5	139.0	166.0	6.0	759.5
C	-	166.0	68.0	211.0	-	-	445.0
D	-	158.0	71.0	200.0	152.0	15.0	596.0
E	79.0	127.0	63.0	103.0	67.0	-	439.0
F	-	-	16.0	-	87.0	-	103.0
G	115.0	191.0	73.0	105.0	171.0	-	655.0
H	-	150.0	-	-	47.0	-	197.0
合計	304.0	913.0	564.5	758.0	784.2	21.0	3344.7

アルファベットは漁業者名で、表3に対応。IとJの出荷はなかった。

も多くのウスバハギを出荷している。表を見れば、こうした期間においてさえ、期間をつうじて大漁が持続するのではなく、漁獲日が限られていることが理解できよう。つまり、ウスバハギの水揚げは、カツオほど短期間に集中しているわけではないが、大漁と不漁が交互にあらわれるというパターンを示しており、漁獲機会を逃さないことが大漁の条件だといえるのである。

ウスバハギがジャンブ・ボンコッにおける重要魚種であることは明白である。重量でみると、漁業者A、B、C、D、E、G、Hの出荷量のなかではウスバハギがもっとも多く、漁業者Fでは第2位である。漁業者Jは、兼業（表3参照）のためかウスバハギの出荷日数がわずか2日だったが、出荷量は全魚種のなかで第5位であった。漁業者Iがウスバハギをまったく出荷しなかった理由は不明だが、年齢が若く沿岸漁業を始めて間もなかったことが関係しているかもしれない。こうした個人差はあるものの、ウスバハギの出荷は重量にして5,962kgで全体の4割にのぼり、金額にして推定RM11,924で全体の2割にのぼる。出荷全体に占める割合は、重量、金額ともに最多であった。

ウスバハギはこのように重要な漁獲対象種であるが、大漁の機会が規則的に訪れるわけではない。しかも、この魚は口吻が小さく通常の釣りの仕掛けでは決して釣れないため、枠付きのすくい網という特別な漁具が必要である。この魚を大量に捕獲するためには、他の漁をおこないながら漁獲機会を待ついっぽうで、魚群に遭遇すればただちに漁にとりかかれるようすくい網を準備しておかなければならないといえる。

最後に、マナガツオ漁の例をあげよう。マナガツオは、2001年にまったく出荷がなかったことからわかるとおり、漁獲機会が非常にまれな魚である。2002年の筆者滞在中には、7月18日、19日、30日の3日間に漁獲があり、合計91.5kgを市場に出荷した。この魚は、キロあたりRM12もの高値で出荷されるが、船曳き網でなければ漁獲できない。ジャンブ・ボンコッ村では、この網が用いられるのはマナガツオ漁の時のみであり、漁をおこなうためには少なくとも3隻の船が協同しなければならない。マナガツオ漁をおこなったグループは一つしかなかったが、漁師たちはこうした特殊な漁業機会にも備えており、機会が訪れれば協同グループを編成するなど、ふだんはみられないかたちで迅速な対処をおこなっているのである。

5．結論

漁業という生業は、本質的に不確実性が高い生業であるといわれる[25]。ジャンブ・ボンコッ村の小規模漁業もその例外ではない。船外機つきの小型ボートの普及は、操業範囲を拡大して不確実性を軽減したかにみえるが、個人操業者の増加と資源水準低下の疑いが濃厚な現在、不確実性は今後も高まっていく可能性がある[26]。

こうした事情に加えて、村の漁業者たちが利用する海域は、他の熱帯海域同様に、生物多様性が高いものの魚種ごとの資源水準は限定されている。こうした海域での漁業においては、多様な種を漁獲するMS戦略（multiple-species strategy）[27]が一般的である。そのなかには、小型定置網漁のように、ひとつの漁法だけで多様な魚種を安定して捕獲できる場合もある。しかし、釣り漁を主に

おこなうジャンブ・ボンコッ村では、漁具による対象魚種の選択性が強く、どれかひとつの釣り漁法だけで生計を維持させることは不可能といってよい。このため、安定した現金収入を確保しようとすれば、ある魚種に関して大漁の徴候を見てとるや漁獲努力をその魚種に傾注するような対処の機敏さが重要となってくる。つまり、ふだんはさまざまな魚種を探索しながら漁獲を得るというジェネラリスト的行動をとりつつ、特定の魚種に関して大漁の兆候を発見すれば、ただちに適切な漁法に切り替えてその魚種に全力を投入するというスペシャリスト的行動をとるのが理想的なのである。本稿は、いかなる兆候を見ていかなる対処をとるかという問題に対してじゅうぶんに答えられなかったが、その前提であるジェネラリスト的行動とスペシャリスト的行動の使い分けを明らかにした。

船外機つき小型ボートの普及は、こうした行動パターンの使い分けに大きな利点をもたらしたと推測できる。すなわち、小回りがきかず舷側が高い大型船では扱いにくい漁具（小型漁網など）の操作が容易になり、漁法のバリエーションが拡大した。このことにより、ジェネラリスト的行動における探索の範囲が広がると同時に、スペシャリスト的行動の際に用いる漁法のレパートリーも増加したのである。ジェネラルスト的行動とスペシャリスト的行動の両方の幅が広がったこと、すなわち漁獲行動が多様化したことにより、漁業者たちは、不確実な漁獲機会を最大限に利用できるようになったといえる。船外機つき小型ボートの発明は、漁場の拡大や省力化、生産手段の個人化といった面での革新を実現しただけでなく、ジャンブ・ボンコッ村の小規模漁業者にとっては、漁獲行動の多様化という面でとくに大きな意味があったのである。

こうした漁獲行動の多様化は、多くの小規模漁業にとっても大きな利便性をもたらすのではないだろうか。ジャンブ・ボンコッ村での調査結果を一般化するのは早計かもしれないが、少なくとも生物多様性の高い熱帯海域においては、漁獲行動の多様性を維持することの利点が大きい。いっぽう漁業の大型化は、明らかにこうした発展とは正反対のベクトルを持っている。大型船での作業を効率化するためには、多様な状況への対処を想定しながら操業するより、一定の漁法に特化して漁船員の統制を図ることの方が重視されるからである。こうした方向性の発展は、関連産業部門の発展に寄与するなど利点も多いが、漁獲対象魚種の範囲を限定してしまうため、資源枯渇に対して脆弱であることは疑いない。

小規模漁業の発展に関する今後の議論においては、漁船大型化や漁場拡大によって問題を解決しようとしても限界があるだろう。むしろ、多様な環境条件と多様な技術条件のもとで操業できるという小規模漁業の特性をふまえて、漁獲行動の多様性を維持しながら経済発展や資源保全を達成するという選択肢も検討すべきではないだろうか。これまで、こうした視点から小規模漁業を論じることが少なすぎたように思う。漁獲行動の多様性を漁業者が維持し高めるための条件は、今後、小規模漁業研究が明らかにすべき最大の課題のひとつであろう。

謝辞

本研究は、平成13－14年度文部科学省科学研究費補助金（基盤研究B）「東・南シナ海の沿岸域における水産資源の利用とそれをめぐる民族ネットワークの研究（研究課題番号13480018）」の一部を受けて遂行された。研究代表者の田和正孝教授（関西学院大学）、および調査地選定の便宜をはかってくださった須田一弘教授（北海学園大学）に御礼申し上げます。また、このようなかたちでは謝意がじゅうぶんに伝わらないとは知りつつも、ジャンブ・ボンコッ村とゴン・バライ村の皆様に御礼申し上げます。

注

1）Fikret Berkes, Robin Mahon, Patrick McConney, Richard Pollnac, and Robert Pomeroy, *Managing Small-scale Fisheries: Alternative Directions and Method,* Ottawa: International Development Research Centre, 2001.

2）Berkes et al., ibid.

3）たとえば、二野瓶徳夫『日本漁業近代史』平凡社、1999年、p.152、志村賢男「漁民層分解と漁家経営の性格」『漁業経済研究』9巻2号、1960年、pp.1－12、など。

4）この問題を沿岸漁業の観点から論じたものとして、平沢豊「最近の漁民層の分解傾向と沿岸漁業政策のあり方――中核漁民論再論」『漁業経済研究』11巻1号、1962年、pp.58－84、長谷川健二「沿岸漁船漁業の存立構造――1970年代以降」『漁業経済研究』35巻1号、1990年、pp.1－22、などがある。また、カツオ漁業およびマグロ漁業という特定業種においてこの過程を具体的に追跡したものとして、倉田亨「漁船漁業における共同経営減少傾向の問題点」『漁業経済研究』11巻3号、1963年、pp.14－24、がある。

5）長谷川、前掲論文。

6）秋道智彌「序・紛争の海――水産資源管理の人類学的課題と展望」秋道智彌・岸上伸啓編『紛争の海――水産資源管理の人類学』人文書院、2002年、pp.9－36.。

7）後藤明「マングローブ域の小規模漁業」秋道智彌編『イルカとナマコと海人たち――熱帯の漁撈文化誌』日本放送出版協会、1995年、pp.181－200。

8）1985年漁業法（317号法令）第8条によれば、マレーシア国内水域での漁業には免許が必要であり、同第9条によれば、免許申請は漁船の新造に際しておこなわなければならない。一部の漁業者は漁業免許の更新だけでなく、それに先立つ船籍登録もおこなっていないといわれる。

9）8月26日から9月17日までの23日間のうち、出漁数を数えた日が17日あった。そのうち11日は20隻以上のボートが出漁していた。

10）この意味では、行政がまとめた漁獲統計にも短所がある。漁業者からの聞き取りや海上労働の直接観察によって漁獲データを得ることの重要性については、田和正孝「小規模漁業の漁獲に関する一考察――マレー半島沿岸漁村の事例から」『人文論究』53巻3号、2003年、pp.83－

101、を参照。

11) Raymond Firth, ***Malay Fishermen: Their Peasant Economy,*** London: Routledge & Kegan Paul Ltd, 1966 [1946].

12) 表中の学名および標準和名は、筆者の目撃しえた個体を同定した結果であり、他の種が同じマレー語魚名で呼ばれることもある。同定は主として Mansor Mat Isa, Hiroshi Kohno, Hitoshi Ida, Hiromi T. Nakamura, Aznan Zainal, and Syed Abdullah Syed Abdul Kadir, ***Field Guide to Important Commercial Marine Fishes of the South China Sea,*** Kuala Terengganu: Marine Fishery Resources Development and Management Department, Southeast Asian Fisheries Development Center, 1998 に依拠した。対応する標準和名は、益田一・尼岡邦夫・荒賀忠一・上野輝彌・吉野哲夫『日本産魚類大図鑑』東海大学出版会、1984 年を参考にした。

13) このほか、本稿の分析とは無関係であるが、特定の漁業者の家計を知るための資料として出荷台帳を用いる際にも慎重になる必要がある。複数の漁業者が協同で漁をした場合には、代表者が出荷をおこなうためである。こうした分析においては、それぞれの漁業者による協同の状況を詳しく聞き込んでおく必要があろう。

14) ただし、伝票はすべてを入手できたわけではなく、1 月 27 日から 3 月 30 日まで、および 10 月 5 日から 14 日までの伝票が欠落している。なお、9 月 5 日から 10 月 4 日までの伝票の記載事項を出荷台帳と比較しなかったのは、冊子の通し番号が 9 月 4 日までのものと連続していなかったためである。

15) 出荷金額の算出においては、魚体サイズによる単価の差異も考慮している。サイズごとに単価が異なる魚種の場合、出荷時の計量はサイズ別におこなわれ、台帳にも略号（k: ***kasar*** ＝大、s: ***sedang*** ＝中、h: ***halus*** ＝小など）でサイズが明記される。

16) ジャンブ・ボンコッ村に隣接するゴン・バライ村に関して、この時期のカツオ漁への就業状況が詳細に報告されている。須田一弘「カンポンのフリーター――マレーシア・トレンガヌ州ゴンバライ村の生業と若者の職業選択」『北海学園大学人文論集』19 号、2001 年、pp. 113 － 138。

17) このほかにドゥグンで大型漁船が増える背景としては、この町が河口に位置しており、モンスーン季の高波から漁船を退避させる港としてすぐれているという地形的条件があげられる。なお、若者たちの就職探しに関しては、須田による前掲論文が参考になる。

18) Department of fisheries Malaysia, ***Annual Fisheries Statistics 1998, vol.1,*** Kuala Lumpur, Department of Fisheries Malaysia.

19) Department of Fisheries, Malaysia, ibid.

20) かご漁のほか、延縄漁で捕獲される魚種も多様であるが、分析対象となった漁業者たちは調査時期にこの漁をおこなわなかった。

21) 観賞魚となるアロワナなどの釣り漁。漁獲があると、首都クアラルンプールの仲買人に直接電話して取りに来てもらうという。漁獲はむろん生簀で運ばれる。

22) そのうちの1人は、表3のKである。

23) 2002年現在のガソリン価格は、リットルあたりRM1.30。

24) ここでは週が金曜日から始まるものとみなした。イスラム教の教義に忠実なトレンガヌ州では金曜日が休日とされ、漁師もこれに従って休漁するため、金曜日を週の区切りとするのが適当と考えたためである。

25) James M. Acheson, "Anthropology of Fishing", *Annual Review of Anthropology* 10, 1981, pp. 275－316.

26) 資源維持のため、小規模漁民を組織化して漁獲努力を削減しようという提案もある。川辺みどり「零細漁民は沿岸漁場を守れるか――マレーシア国ペナン島の浅海漁民の試み」『地域漁業研究』40巻1号、1999年、pp. 37 － 53。マレー漁民組織化の必要性については、Conner Bailey, "Social Relations of Production in Rural Malay Society: Comparative Case Studies of Rice Farming, Rubber Tapping, and Fishing Communities", In John J. Poggie and Richard B. Pollnac (eds.) *Small-Scale Fishery Development: Sociocultural Perspectives,* Rhode Island: ICMRD, 1991, pp. 19－41, も参照。

27) 秋道、前掲論文。

Small-Scale Fishing Activities and Gear Selection in Terengganu, Eastern Peninsular Malaysia

IIDA Taku

Abstract

This paper describes the variety of fishing activity by Malay fishermen in the village of Jambu Bongkok, and analyses their decision-making on fishing method selection, based on participant observations and fishermen's shipment records. Their fishing activities include fish trapping, squid trapping, angling near simple fish aggregating devices made of palm leaves, bonito or Spanish mackerel trolling, squid trolling at night, shrimp fishing with gill nets, drive-in fishing with gill nets, ray fishing with gill nets, pomfret fishing with boat seine, and leatherjacket fishing with dip nets. Most of these methods were covered by almost all the fishermen in the village, considerably owing to introduction of outboard engines which facilitated handling small gears.

In actual, each fisherman tested several methods in a single fishing trip, because he couldn't predict which method would bring a good catch. In tropical waters, where the biomass is comparatively limited in spite of its significant biodiversity, few single species bring considerable cash for household budget. Even though some species are significant for fishermen's economy, their encounter with fishermen is limited and unpredictable. In such situations, fishermen always have to expand their repertoire in order to increase the opportunity of encounter with schools of fish. Such a generalist behavior in search of fish, however, must be changed into the specialist one, no sooner than the fisherman finds the symptom of a good catch. Such immediate shift of behaviors was generally shared among the fishermen observed.

The variety of fishing activity and immediate shift of activities seem to be characteristic of small-scale fisheries, though little has been said about it in fishery development or resource management programs. Future discussions of small-scale fisheries are expected to focus on the condition where fishermen's repertoire is maintained and expanded.